騰海舟

第二卷

子母澤寛

勝海舟

第三巻

長州征伐

新潮社版

勝海舟　第三巻・長州征伐

昭和四十年二月二十三日印刷
昭和四十年二月二十八日発行

著者　子母澤寛

発行者　佐藤亮一

印刷所　三晃印刷株式会社

製本　新宿加藤製本所

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(代)
振替東京八〇八番

定価　四三〇円

乱丁本はお取りかえいたします

© Kan Shimozawa Printed in Japan

勝海舟

第三巻・長州征伐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

霧深し

この頃麟太郎は、なにかにつけて怒ってばかりいる。

おたみは、若い時分から、主人の癇癪には馴れっこで、なんと難題をいわれても、にこにこしているが、お順が、ときどきそれに逆らっては、却ってみんなを、はらはらさせる。その度にお順さん、黙っていらっしゃいまし、旦那様も外へ出ては苦しいお勤め故、せめて内で勝手放題をなさらなくてはお気が詰って困りましょう、おたみがそういった。

麟太郎のむかむかするのも尤もである。幕府の遣口は日一日と因循姑息で、にっちもさっちも行かなくなると、閣老も若年寄も、奉行も、病気といって引籠って終う、その度に、外に対しても内に対しても、信義を失って行くだけだ。

すでに償金を払った生麦事件が、今度は薩摩と英吉利との戦になった。これも幕府の失敗だ。第一薩摩と英吉利との直接交渉にするなんぞはべら棒な話、如何に大きくても薩州は幕府治下の単なる一藩、日本を代表する幕府が一切解決をしなくてどうなるのだ。幕府の腹では、英吉利と戦をさせて、雄藩薩摩の力をそぐつもりだが、その代り、幕府は日本を代表するものではないと、自分で声明したも同じ。麟太郎は、

「馬鹿の底が知れねえわ」

お城から帰って来て、その晩は食事もせずに寝て終った。

次の日、杉がやって来て、これをきくと、

「幕府は思う壺で喜んでいるでしょう」

と笑った。麟太郎は、しかし、戦というものは、勝ったにせよ、敗けたにせよ、それで自分の力というものがはっきりわかる。だから、それから一年後、十年後のその国の力は、百倍にも千倍にも飛上るものだ。今、薩州がやられて喜んでいる、五年後、いや三年後を御覧よ、薩州、長州は幕府なんぞの手におえなくなる、そんな時になって泡を喰らったって、もう遅いよ、ましてや薩州は充分用意をしてかかっただけに決して敗けてはいねえわさ、軍服のままの英吉利の士官の死骸が渚に打揚った、こ奴あ薩州の敗けてねえ証拠だよ、といって、

「それにしても杉、薩州では、百名位の決死隊が、八隻の小舟に分乗して商人風を装って英艦に近づき、隙を見て飛込んで、乱撃するつもりで出かけたとよう、英吉利にも油

断なく、これは失敗に終ったらしいが、え、旗本にそんなのあいるかえ」
「しかし、元寇じゃあるまいし遣口が泥っぽくて幼稚ですね」
「遣口じゃあねえ、そんな胆の奴がいるかという事だ、胆せえあれあ、策は自ら機に臨んでどうにもなる、こ奴の問題だ」
麟太郎は腹を叩いた。
「こんな時を、こっちはいつもいつも空論ばかりよ。戦争の事なんぞ、長々いろいろ評議をしたとてどうなるんだ、今といったら今直ぐに立つ、要は簡単だ、上下唯死を覚悟していれあそれでいいのだ。それになんでえ、きのうも、営中で防禦の議上、おいらの事を、勝は暴論ばかり吐くといった奴がある」
麟太郎は、この八月のはじめから、海陸御備御用取扱を命じられていた。御家柄で、弟子の木下謹吾も同役だ。

*

「馬鹿共がいつもいつも深慮遠謀といっては、敗ける事ばかり考げえているわさ、網を張ってそ奴へ魚を引っかけようとする、が、海は広いよ、魚はその網の上を行く、下をくぐる、こっちの注文通りには行ってくれねえ、その行かない注文ばかりを頼むのさ。昨日は、謹吾と二人、顔を見合せて思わず大声で笑ったら、目付の杉浦正一郎が怒ったよ、おいら云ってやったんだ、そんな相談なら、したって、しなくたって同じだとな」
「相変らずですね」
と杉は、どうも長崎で修行をすると人間の鼻っ柱が強くなると見える、ごて屋の松本良順がとうとう西洋医学所頭取になるような噂ですよ、しかし啖呵は気に入りました、西洋たあなんだ、医学だろうがなんだろうが、学問がこっちの身につけあ、もうこっちのものだ、西洋と冠をつける事あない、医学所だけで結構だといってるそうですよ。
「当り前だ。緒方洪庵亡き今日、先ず医学はあ奴だね。それに伊東玄朴と不仲で喧嘩をしている噂は、おいらも聞いていたが」
「それあそうでしょう、まるで肌合が違いますよ、玄朴は実に要領のいい奴だ、あ奴の話上手には、わたしも舌を巻いた事があります」
早い話ですが、浄瑠璃坂の丹鶴書院で、あ奴が主人の水野土佐守と話しているのを隣室で洩聞いた事がある、言葉の応対振りが如何にも巧妙で、学者でもなし、武家でもなし、一体何者だろうと、ほとほと感心して、後で聞いたら玄朴だという、道理こそと思いましたな。
「良順はぶっきら棒よ。あ奴あ豪傑だ、金儲けのうまい玄

朴たあ違うさ」
「良順は西洋医学所の攻撃をまるで仕事にしていた。医学は日新又日新の学だ、然るに医学所の教授するところは、総て旧学陳腐、今日の実用には適さないと、一々例証を以て論説するので、流石の洪庵先生も弱っていたそうですね」
「玄朴も事毎にやっつけられていたようだから、近々には奥詰典医を罷めるだろう」
丁度その日そこへ、木下謹吾がやって来た。表向きは同役だが、ここでは昔ながらの弟子師匠だ。
「お聞きになりましたか松平備後守の一件を」
「なんだそれあ、松平備後守ってのあ歩兵御頭じゃあねえか」
「そうです、それが、ある閣老の推挙で軍艦奉行になるという」
「うーむ。それがどうしたえ」
「なるのはいいんですが、何処から洩れきいたかみんなが納まらない」
「納まらねえと」
「頭取では小野友五郎、それに病気でねている伴鉄太郎、悉く辞表を出して来ました、元より、わたしも出します」
「うーむ」
「取調役組頭では——」
と云いかけた時に、お糸が、次の間の廊下から、
「吉岡様がお見えでございます」
といった。

*

ほうら来た張本人がよ、麟太郎は、木下を見て、にやにや笑った。真実、おかしくって、海軍の海の字もわからねえ備後守の下になんぞつけるか、と云い出したのは御軍艦操練所取調役組頭筆頭の吉岡勇平だ。木下もそれは知っているから、思わず、ぷっと吹出した。
吉岡は相変らず、元気のいい調子で入って来た。白麻を着ていた。この吉岡が、まだ挨拶をしないのに麟太郎は、御機嫌ようと云いてえが、不機嫌らしいねえ、と云った。木下が来ている上は、万事がわかっていると思ったのだろう吉岡は、むかむかしますよ、と云いながら、
「わたしは、海軍は海軍として、がっちりと固めて行く、外からは指一本ささせないというのが本当だと思います」
それに、なにか政治的の力が動いて、これ迄海軍には縁もゆかりもない、従って少しも海軍を知らない人間などが枢要なところへ坐られては、旧弊忽ち興って、実に由々しき大事だと思います、海軍には海軍独自の立場があり、機密があり、方針がある、その進路に些かの邪魔をされても、まだ発展途上にある海軍として、否、日本国将来のた

めにも、この上の不為は無いではないでしょうか。このわれわれの赤誠は当然認められなくてはならぬ筈だ。先生の御意見は――吉岡は例によって、生一本なだけにむきになっている。

麟太郎は、まあまあ、となだめるような顔つきで

「そ奴に軍艦をあずけてやらせて見れあいいじゃあねえかえ」

「今、そんな呑気な事を云われては困ります、海軍は、閣老の力も若年寄の力も利かぬところだという事を、先以てはっきり見せなくては、神国千万年の患になりますから」

「いいよ、あ奴らにやらせて見るが一番だよ、一度で手を焼く、こっちで頼んでも二度とあちらから手は出さなくなるわさ」

「生温い生温い、先生、それでは生温い」

「そうかねえ、木村先生の御意見は、え」

「摂津守様は、ああしたお方ですから、まだ何事も申上げてない」

「おいらにだけ片棒担がせるかえ、お前さんきっと、叱られるよ」

麟太郎は、言葉の上では反対らしくも見えるが、腹の中では、やれやれと煽り立てているようなものを、吉岡は感じていた。

吉岡は、夜になってから帰って行った。決して話を真面目にはせずいつも白っとぼけてはいるが、勝という人間の正体を知っているだけに、吉岡は、自分と反対の科白をきかされながらも、なんとなく、胸のつかえが下ったような心地がしていた。

西へ坂を下って、新町つづきの赤坂御馬場へ出ようとしたところで吉岡は、ふと立停った。向うから、聞知った声が交って、宵闇の中を五六人やって来る。一人の白い着物が目立って見える。

*

「柴田さん、柴田さん」

吉岡から声をかけた。同じ組頭の柴田隼太郎が真っ先きで、小林甚六郎、石川壮次郎、それに取調役の桜井貞蔵、高橋震太郎がいる。

「おっ、吉岡さんだ」

と柴田はそういって、みんなで屋敷へ行ったら、勝先生のところらしいときいたから、こっちへ廻って来たところだ、取調役十五人の中大岩啓之助がただ一人、辞表に不服だが、他は何れも賛成で、こ奴をふところに、膝詰めにしてやろうと、松平備後守の屋敷へやって行ったが居留守を使って逢わない、押切って上り込むのも如何だし、屋敷中がひどく狼狽動揺の様子だから、充分薬の利き目はあった

と思う、ところで勝先生の意見はどうだえ。
「いつもの通り、空っとぼけて勝手をいっているが、なんでいけないものか」
「じゃあ、明日は、操練所頭取まで辞表を纏めて差出して置いて、様子を見るか」
「まあ、そんなところだ、それでいかんようなら、次の策だよ」
操練所頭取は、これ迄の御船手頭向井将監が船手方の廃止に伴って、当役に当っていた、小十人頭の格だが、二千四百石いただいている。
丁度その頃、麟太郎のところには、大阪の佐藤与之助から長い手紙がついて、杉と二人で、話しながら見ていた。宗対馬守が、幕府へ頼んで昌光丸を拝借してそれで帰国したが、颶風に逢って大破損をし、三人も死人が出来た、鈴木録之助氏は、船と巌との間に挟まれて死んだ、このような事はひいては海軍隆盛に影響があると思うと気がかりだという事や、勝の関係ある各地の砲台築造のその後の経過、それから、神戸の塾へ、長藩有志五十人余が、勅命を軽んじ、あまつさえ兵を率いて上洛した大逆臣小笠原図書頭を討つために、各方面の同志を集めている、各々も一味せよと、烈しく談じ込んで来たが、坂本竜馬が応接して、これを説破して去らしめ、塾生もまた一人の応ずるものもなかったという事が詳しく書いてあった。
「竜馬にかかっちゃあ叶わねえよ」
「そうですかなあ。こうしかめっ面をして首を突出して物を見てるところなんざあ大した奴にも見えなかったが」
「あれで仲々太てえ奴よ。あ奴だの、長州の桂小五郎だの、宗対馬守様の家来の大鳥友之允だの、あっちには、おっかねえ奴が多勢いるよ。中にも竜馬は、根が身分の軽い奴だけに、どんな人にでもどしどしぶっつかって行くよ。ほうら、ここにも書いてある」
竜馬は摂海監察使として下向した四条隆謌卿を明石表に訪ね、
皇国浮沈の界、不絶歎慨、神戸は関西の海局と相定め、朝廷の令を以て人物御任撰、惣都督に据、彼所にて、芸術人品悉く相撰、貴賤を論ぜず、登庸為致候わば、皇国の人物、爰に集い、摂海及四隅の防禦厳革に行届可申、入費の儀は関西の諸侯より償い候事に勅命下り、また東武の海局は、関東の局とし候て、皇国武威、爰に盛に相成候わばと、右一々建白仕――。
「この建白が許されそうなら、すぐに越前へ行って、それから江戸へ廻るという。こんな奴よ」
*
越前へは、竜馬奴、また春岳さんへ金策に行く気だろ

う、神戸は西、江戸へ東の局を建てる論は麟太郎とかねて腹を合せてあるのだろう。
「江戸じゃあ、なんでもかでも泥縄の評定々々、え、こんな実行力のある奴が、どしどし出て来てるを知らねえのだ」
杉は黙ってきいていたが、さ、遅くなった、今夜あこれでお暇します、そういってかえりかけて、玄関へは行かず、どしどし奥へ入って行った。おたみとなにか話して、大笑いをしてからかえって行った。
おたみが、その辺を取片づけに、麟太郎の居間へ来た。
「杉あなにか用だったかえ」
「え、別に用というでもございませんが、お金さんが、また赤ちゃんだそうでございます、女というものは、よく、おっかなくなく、ひょこひょこ子供を産むものですね、なんぞと申して行きました」
「ほう、そ奴あ目出てえね。いつ生れるえ」
「今日明日だろうとのことでございますから、明日はわたくし、参って見ましょう」
「お金を持って行っておやりよ」
「はい、そのつもりで居ります。それはそうと、あれは如何に致しましょうね」
「なんだえ」
「お孝の縁談の事でございます」
「ああ、匹田家からの話かえ。さあ、なあ」
「御身分に御不足でございますか」
「馬鹿お云いな、六百石でお家柄で、当人がよく出来ているというじゃあねえか、貧乏勝になんの不足があるものか」
「では、どうして——」
「お夢がいなくなっただけで、おいら、稀にけえって来ても、火の消えているような気持がする。この上、お孝に行かれてはなあ」
「まあ」
おたみは、腹を抱えるようにして笑い出した。あなたは、お夢の時にもそのような事をおっしゃいました。所詮、娘どもというものは遅かれ早かれお嫁にやらなければならぬもの、そのような事を仰せられては困ります。女の子が、みなみないなくなっても、勝家には、後を嗣ぐべき男の子が居るではござりませぬか。それに——とおたみは、
「実は申難いのでございますけれど、お孝はあのように女らしゅうもない娘で、お琴やら茶などいう事よりは、漢籍をよんだり薙刀を使うたりするのでございます。それがお順さんの側にいては、いっそう——」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お順あ馬鹿よ。おいら、本当に、お前にゃあ、すまねえと思っているよ」
「なにをおっしゃいます、わたくしはそのような事を申上げて居るのではございませぬ」
「そう、それあ知れているよ。おいら、只、あ奴の我儘を黙って虫を殺しているは、もう行先きの知れているお母上に孝行の一つだと思っているだけなのだ」
いつもになく麟太郎が、しんみりとして来たので、おたみは、その話を、もう、それっきりにして終った。尤もお孝はまだ数え年で十五、急がなくてもいい縁だ。ただ、余り貰ってくれる先きがいいのと、婿になるべき四田兵庫のせがれ正善は、学問も剣術もよく出来て将来ある人だから、母としては気持の動くのも無理のないところであろう。
おたみは話していながら、二度ばかり軽く自分の肩を叩いた。
「お前、肩が張るかえ」
大した事もありませぬ。じゃあ杉に揉ませるがよかったになあ、あ奴の按摩あ上手だ。
「ほほほほ、杉先生は未だに田町の時のように時々お母上の肩を揉んで下さいますよ」

*

「どれ。おいらも、お前を揉んでやる」
麟太郎は、立ち上ると、おたみのうしろから、いきなり両肩へつかまった。まあまあと、笑いながら、それでもおたみは腰を落として坐っている。こんな事は時々やる、が、いい加減なところになると、飛んだいたずらをしては、喜ぶのである。また首根っこでもつまみ上げるかなにかするのだろう、どうせそんな事と覚悟をしながらも、おたみは揉んでもらっていた。
お糸が入って来て、にこにこ笑った。麟太郎は、平気な顔で、どうだお糸、お前も、おいらのようないい亭主を持たなくちゃあいけねえよ、といった。
「とんだ旦那様だねえ、お糸」
おたみが云いながら、急に顔をしかめた。そろそろなにかやり出したらしい。
お糸は、只今、宗対馬守様向柳原のお屋敷からお使いがございまして、明朝、御留守居のものがお伺いいたしますからお目通りをいただけますようにとの事でございました、といった。麟太郎は、そうか、というような顔つきをしたが黙っていた。
おう痛、おう痛、おたみが身悶えし出した時には、お孝も小鹿もそこへ来て、大笑いをして、それっきりになって終った。麟太郎は上機嫌であった。

翌朝、対馬守の江戸留守居がやって来たが、豹の皮と、立派な拵えの庄兵衛興正の刀を贈ったのだ。興正は虎徹の養子、後ちに同じく長曽禰虎徹興正と称ししかも父以上と云われる業物作者で、しかもその作は世に稀なりと珍重されたものである。いつもいつも海軍の事で麟太郎に意見をきくので、そのお礼だろう。

それから三日ばかりして、登城した。出て見ると、お坊主が、先程から二度程、御老中板倉周防守様がお召でございましたという。その用部屋へ出て行った。周防守は、たった一人でつくねんと、物を考えていられた様子であった。

「おお」

と、そういって、操練所の諸役一人残らず退役を願出て、病気引籠をしているが、どういう訳であろう時局多端を弁ぜざる致し方、不所存に思うが——。元より周防守の耳には、その真相が知れているに違いないし、ここで勝がなにをいう必要もないのである。御意の通り、御意の通りと、二度お辞儀をしただけであった。

「なんとか相成らぬか」

「成りましょう」

「うむ」

「成りましょう」

麟太郎は、大きく眼を開いて、ぱちりとの瞬きもせず、周防守の両眼を見詰めていた。周防守も、暫くこっちを見ていたが、やがて微笑した。周防守は肚のある人だ。

麟太郎が、操練所へ廻った時は、退役組は一人残らず此処へ出て来ていた。ただ、伴鉄太郎だけが病気で来られない。

みんな広間へ集めて、麟太郎が、一段高いところへ突立った。

「今、幕府海軍に於て、退役を願わず、赤誠お役を相勤めるのは、この勝が一人だが、斯の如く切迫の御場合、さて一人ではどうもならぬ。大切の御軍艦に故障があったらどうするか、上に対し奉り恐入った次第、否やの趣、今一応、確と承りたい」

*

隅の方で、吉岡のにやにやしているのが、大きく映った。こらこら吉岡、なにがおかしい、そういう麟太郎も、にやにやして、

「各々の決答を待つ。次第によっては勝も退役、誰もいない海軍が出来る。それでもいいか」

それっきりで、さっさと、軍艦奉行部屋へ引込んで行く。

「先生、一人残りましょう松平備後守」

そういう吉岡をふり返って、
「おい、おいら演説の草稿がある、お前さん達の顔を見たら、しゃべるが馬鹿らしくなったから、いい加減をやっつけた、こっちでこれを御覧よ」
ふところから、なにやら書いた紙を見せびらかした。
操練所の中は、もう薄暗かった。木下謹吾と小野と吉岡が、集まって、行燈をつけて読み出した。
「武臣武事ヲ忘レ、遊惰因循ニ相流レ、兵備御充実ナシ、上議皆是ヲ明ニ知ルトイエ共」
吉岡は、先生、これあ、上議皆是を知らずのお間違いじゃありませんか、といった。麟太郎は、そっぽを向いて、後を読め後を。
「無御拠御場合ニテ、鎖港御談判御決定ニ相成リ、既ニ、上様、御直ニ決心勉励致スベキ旨、仰セ出サレ候上ハ、臣子ノ職、宜敷精力ヲ尽シ、一死ヲ以テ多年ノ御高恩ニ報ズベキハ、必然也、殊ニ御軍艦ハ御用甚多ク、各必死ヲ以テ戦闘ノ議アルベキニ」
「いいか」
麟太郎は、こっちを見た。
「此場合にだな、他事を以て御役御免を相願い、或は病気引にて、出勤しねえは、なんとも道理がわからねえ。見ろ、愚拙、狐疑甚敷候と書いてあるだろう、若又、不肖命令する処、各意に応ぜず候哉」
「先生、これあ驚いた、先生迄が、あちら方とあ、どうです」
「吉岡、とまあこういう次第で周防守様と、不言不語の諒解がついたのよ」
「え」
「あしたあ、備後守が御役御免になる、それで、いいだろう」
「なあんだ、先生、それを先に云って下されあいいじゃあございませんか」
「久しぶりで、お前さん達の、不平面が見たかったのよ」
冗談をいってはいるが、ああよかった海軍が政治力に侵されずに済んだ、そういうよろこびは、みんなの瞳に溢れて行った。吉岡が、そこを飛出して行った。別室にいる人達が手を打って喜ぶのが聞えた。
「先生、お骨折、有難う存じました」
小野が丁寧に頭を下げた。
「おいらに礼をいう事あないよ、張本の吉岡の功よ。だが、こんな事位で、総退役はいけねえよ、申立る事あ表向きどしどしやるがいいが、今日の場合、一日でも二日でも御役をおろそかにしちゃあいけねえよ。とは云うものの流石の御老中方も今度あ少々思い知ったね、周防守様に任せ

つきりで、他の老中は、首も出さねえよ」

*

長州が仏艦と戦った時に、向い側の小倉藩が知らぬ顔をしていた。攘夷の勅諚を軽んずる仕方だというので、京から中川宮が総大将でこれを征伐に行かれるという噂が伝わる。そうかと思うと、幕府がいつ迄攘夷を実行しないから、関東征討の軍が発足するなどと噂が立つ。大和には天誅組の旗が立つ。そうかと思うと、俄かに朝廷の御議が一変して、それ迄、その力を以て恐れ多くも朝廷の御議をさえ動かし奉っていた長州が、会津、薩摩の連合運動で、禁門の守衛を追われ、三条実美以下攘夷論七卿が雨の中をずぶぬれで都落ちだ。

夜更けてこれをきいた麟太郎はどういうものか、いつもと違って今宵だけは、じっとしてはいられなかった。自分で、既舎から、馬を曳出すと、これへ一鞭当てた。江戸の街は、ひどい夜霧で、雨に打たれたように上下が、びっしょりだった。その霧の底に、辻番所の灯がぼんやりついて、この頃、めっきり厳しく警戒している大名屋敷の番侍は、樫の棒を突鳴らしては、馬で行く麟太郎を誰何した。

「御軍艦奉行勝麟太郎」

霧でよく見えない対手の頭上から吐きつけるように、そう呶鳴っては、通って行った。

霧の中に、外桜田の板倉家上屋敷は、死んだように静まっている。

馬の蹄の響をきいたのだろう、門の潜りから不寝番らしい若い侍が二人、提灯を手に姿を見せた。

しかし、この時は、麟太郎は、自分のしている事を、少し冷たく見直す事が出来ていた。この夜中に、訪ねたところで、逢う訳もなし、また考えて見ると今となって、一介の軍艦奉行が、それ程、あわてて見たところで仕方がない。

暫く馬を停めて、馬上のまま、その侍達と、対峙していたが、そのまま、また俄に馬を引返して終った。うしろから、誰方、誰方、と少し険を含んだ調子で、自分の名をきいている声がした。

次の朝、麟太郎は夜中に馬を飛ばした興奮などはけろりと忘れたか、自分の室の縁の廊下へ御蓆を敷かせ、ここへ仰向けに、引っくり返っていた。

杉がやって来た、何処かで京の変をきいて来たのだ。

「長州がいけなくなったそうですね」

「なあに、一雄倒るれば即ち一雄起るよ」

「それあ世の常の有様で仕方がないですね」

「ほんに乱世の姿勢よ。朝威幕威共に地に墜つ。阿呆奴ら、喜ぶのあ毛唐人ばかりだ——杉、鉄砲屋でもおはじめ

な。儲かるよ」
「それもいいなあ。ところで、はじめて生れた男の子、まだ名をつけずにある。一つ先生につけて貰いましょうかな」
麟太郎は、突然、おい、おたみおたみとおたみをよんで、おいら登城する、仕度をしろ、と叫んだ。杉は黙っていた。麟太郎は、着物を着、上下をつけて、脇差をさし、二三歩、歩き出してから、
「杉、成吉とおし、吉ニ成ル」
そう云って、そのまま、みんなに送られて玄関へ行った。
純道の長男この成吉は、後僅か十三歳で仏蘭西に留学し、麟太郎の言によって造船学を修めたが、日本軍艦敵傍の廻航に同乗し、途中、艦と共に消息を絶って全く行方不明となった人である。

*

麟太郎が、お城で、御用部屋へ出て行くと、板倉周防守は、この六月溜間詰から老中になった姫路十五万石の酒井雅楽頭忠績と、額を突合せるような恰好で、頻りに密談をしているところであった。忠績は後ちに大老になった人だ。廊下へ膝をついてその終るのを待とうとした。
「いい、いい」
周防守はそう声をかけて、
「勝、また叱言か」
と大声で笑った。麟太郎は、そのまま膝行して近寄った。瞼が、今にもこぼれそうにうるんだのを見て、周防守もう一つ向いた。
「災難牆に起ろうとして居ります。この上は、将軍家御軽装を以て御上洛遊ばされ、只々赤心誠実、天朝を御警衛、天下の大道を説き、旧弊を改め、大阪御城にお留りなされて御遵奉申し奉るより外はないと存じます、恐れながら、傍議因循の時ではござりませぬ」
周防守は、一度、大きくうなずいて、顔を上げると、
「実は只今熟談、取敢えず、雅楽頭殿が京へ上られることとなった、どうだろう御軍艦の都合は」
元より、麟太郎に否やはない。ただ、この場に及んでも、なお将軍直々の再上洛はなく、先ず雅楽頭が行って、瀬踏みをする態度が、少し腹をたたせた。しかし、それとて、なお因循評議を繰返すに勝る事百倍である。
実は今日は、周防守の前に、何もかもさらけ出して自分の考えるところを開陳し、直ちに、布子一枚、江戸を追放されるも一歩も退かない決心で登城したのだが、そこまで云わない中に先手を打たれた形となった。しかし、いくらか老中方の遣口も進歩した、そう麟太郎は思ったのである。

雅楽頭を乗せた順動丸が、大阪天保山沖へ碇を入れたのは、それから九日の後であった。もう暦は九月のはじめ。航海中、空はずっと晴れつづいたが、毎日々々、冷めたい風が吹いて、海も荒く、そちこちの港へ入っては、風を避けたので、意外に日数をくって終った。

雅楽頭は、専修寺を旅館として、ここへ入り、麟太郎は、いつもの本願寺へ帰って来た。艦の入ったのはまだ夜の白々明け。麟太郎の寺へ来たのはお昼前だ。

「おかえんなさい」

方丈の玄関に、坂本竜馬と、ここのところ少し手許を離れていた土州の近藤長次郎が出迎えた。竜馬は紋のついた羽二重の素袷を着ていた。

「姫路侯も折角のお出でだが、図書頭の二の舞を踏まんけりゃあいいですがね」

竜馬は座敷への廊下を歩きながら、麟太郎のうしろからそう云った。麟太郎は振向きもせず、そ奴は艦の中で、おれも口を酢っぱくして云って来たよ、ただ繕わず、誠実一辺で行かなくちゃあいけねえと。そう云ってから、

「長次郎、お前、ちょいとこれから越前へ行って貰おうかね」

*

近藤長次郎が、麟太郎の密書を持って、越前の春岳さんのところへ急行したのは、その日の中であった。

次の朝、佐藤与之助と、例の水戸の兜惣助が、神戸から、本願寺へやって来た時は、麟太郎は酒井雅楽頭の専修寺へ呼ばれて行って、竜馬だけがそこにねころんでいたが、少しばかり二人と話をして、間もなくこれも何処かへ出て行った。出がけに、惣助の顔を、いつものように、眉の間へ八の字をよせ、眼を細く、鼻を突出すようにして見て行ったが、惣助は、

「竜馬、不機嫌だな」

そう呟くようにいった。与之助も、ほんとに、そんな様子だと思った。

間もなく、麟太郎はかえって来た。二人を見たが黙っている。

「岡田以蔵は、まだ姿を見せねえかえ」

暫くして、やっとそういった。

「まだです。この頃、守護職様手付の新選組が頻りに有志輩の監視をしているので、あの局中へもそれとなく依頼してありますが。京の御新造さんも大そうお案じでして」

与之助のいっている最中に、おい、兜、と麟太郎は、

「水戸家は、江戸を圧迫の御方策らしい噂だよ、お前、ここにいていいのかえ」

「は？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com